

書 評

山田 孝子 著

『アイヌの世界観』

— 「ことば」から読む自然と宇宙 —

伊藤 泰信*

著者は、本書の著者紹介欄によると、現在北海道大学教養部に属し、理学博士。専攻は文化人類学・認識人類学であり、著書に『ヒトの自然誌』『アフリカ文化の研究』（いずれも共著）などがある。以下に示す目次によく表れているように、本書は「アイヌの世界観」について認識人類学の視点から、文字通り総合的・全体的に考察を試みようとするものである。

第一章 アイヌの世界観

- 1 モシリ（世界）
- 2 アイヌ＝モシリ（人間の世界）の誕生
- 3 カムイ＝モシリ（神々の世界）
- 4 ボクナ＝モシリ（下方の世界）
- 5 アイヌの他界観
- 6 相補二元論的宇宙観

第二章 霊魂とカムイ

- 1 霊魂の観念
- 2 カムイの観念
- 3 語彙素構成からみる神性の認識
- 4 人間的なカムイ像
- 5 カムイとジェンダー
- 6 人間との関係

第三章 アイヌの植物命名法

- 1 植物名が語る認識のプロセス
- 2 基本名からみる命名のプロセス
- 3 対照名からみる命名のプロセス
- 4 類別的認識
- 5 植物観と神格化

第四章 動物の分類と動物観

- 1 動物の個別名と包括名
- 2 個別化の原理

- 3 類別カテゴリーの外延

- 4 類別化の原理

- 5 動物分類と空間分類の連繫

- 6 動物のシンボリズムと神格化の基盤

第五章 諸民族との比較

- 1 日本上代における世界観との比較

- 2 北方諸民族における世界観

- 3 アイヌの世界観

第六章 世界観の探求—認識人類学的

アプローチ

- 1 言語と文化

- 2 イーミックな観点とエスノ＝サイエンス

- 3 「もの」の名称から認識の体系へ

- 4 象徴体系としての世界観

- 5 メタファーとしての動物

- 6 言語の象徴表現と世界観

- 7 認識人類学の意義

第一章においては、カムイ＝ユーカラ（神謡）・オイナ（聖伝）・ウエベケル（昔話）などの資料の分析から、世界を表現する多様なアイヌ語の語彙が、それらの物語のなかでどのような文脈で登場するのかに注意を払いながら、宇宙観の検討を行なっている。

第二章はアイヌの世界観・宗教の基盤となっている霊魂やカムイの概念についての検討である。ここでは多様なカムイの概念を取り上げ、カムイの名称の語彙素分析、名称とカムイとして具現化される動植物との関係をもとに、その背後に潜む超自然的世界の認識体系を明らかにしている。また神格のジェンダーによる性格づけの考察からアイヌのジェンダー観についても言及している。

第三章第四章においては、著者は認識・象徴人類学的見地から世界観を明らかにする上で動植物全体の認識・分類体系を分析にすることの重要性を前提として、三章では植物の、四章では動物の世界を取り上げ、特にその名称・命名法からアイヌの世界観の背景を探ることを試みている。

第五章では霊魂の観念などの違いをもとに

*筑波大学大学院地域研究研究科

アイヌの世界観と隣接諸文化、とくに日本上代およびシベリアの北方諸民族における世界観との比較検討を行なっている。

そして最後の第六章で、世界観の探求のための認識人類学的アプローチの意義と今後の展望について述べている。

私は本書を二つに分けることができるように思う。すなわち第一章から五章までと第六章の二つである。前者はアイヌの世界観の認識人類学的分析であり、後者は認識人類学自体の方法論と意義について述べられているが、アイヌについてはほとんど言及されていない。著者は本書のなかで、アイヌの世界観の研究において、動植物の認識との関係や自然認識も含めた統合的視点からの研究、認識人類学的アプローチからの研究はこれまで行なわれていないことを述べたあとで「本書は、認識人類学的視点が世界観の探求にとって重要であることをアイヌの事例によって示すと同時に、このアプローチをとることによってアイヌの世界観の新たな理解が可能になることを提示しようとするものである」(12頁)としている。つまり認識人類学的視点で個別文化の超自然観・世界観を探ることの有効性を示すためにアイヌを「事例として」考察しているのである。このような態度が第六章の内容につながっている。この点でアイヌの世界観そのものを探るための手段として認識人類学的視点を導入するといったアプローチとは、小さな違いに見えるが実は大きく異なる点ではないか。そしてさらにこの点が、アイヌ文化自体を考察し、アイヌ「本来の」文化の再構成を試みる、いわゆる「アイヌ学」と袂を分かち点であるようにも思われるのである。

もうひとつ気付いた点を述べる。第一章で久保寺逸彦の採録した神謡を資料に、「追放の世界」を表す語彙が対語の組として表れることをとりあげ、久保寺がそれらの語彙の一つ一つが複層の追放の世界それぞれを表すとした解釈を批判し、文脈を考慮すればそれらの対語の表現は単

層の世界の属性を表すとしている(35-9頁)。

このことは正しいと言えるが、資料が神謡すなわち「声の文化」の産物を文字に起こしたものであるという性格を考慮すれば、こうした対語は声の文化に特徴とされる同じ事のくりかえしであるとみることが可能である。この点は非常に些末的にみえるかもしれないが、実は資料の問題と密接につながってくるものである。特に著者は従来あいまいであった資料の時代性と地域性に関して、前者は19世紀末から1930年代ごろのアイヌ文化で、1950年代までに出版されたものとし、後者は胆振および日高の沙流地方に限定している(13-4頁)ことが評価されるだけに、扱っている資料の性格をあえて指摘するものである。

著者も述べているように、従来のエスノ＝サイエンス・認識人類学の研究は、語彙の意味領域を客観的・普遍的な概念で定義できる領域(親族・色彩等)を対象としてきたが、本書ではアイヌの世界観を、自然認識(動植物観)からジェンダー観、超自然観までもを統合した現象世界を説明づけ秩序化する認識の体系として考察しようとする、象徴論・エスノ＝サイエンスなどを含みこんだ広い意味での、著者独自の認識人類学的手法による探求であり、このようなアプローチによって、アイヌ文化のもつ豊かさが浮き彫りにされ、従来漠然と動植物に神性を認める等とされてきたアイヌの世界認識に精緻で体系的な分析のメスを入れたものとなっている。

ただし、ここでの世界認識は深層構造に関わるものであって、「アイヌ」(それは人間を意味する)がいかに生き、かつ考え、行動しているかという問題とは別の次元に属する。しかし文化の豊かさをいかに用いるのかという問いは、近年取り沙汰されるアイヌ民族の「主体性」「復権」という政治的な問題と無縁ではないはずである。この問いはアイヌを研究する者に鋭く問われていることも付言しておく。

(1994年：講談社)